大阪樟蔭女子大学論集第41号（二〇〇四）

萬葉集

――一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研究(八)――

北村英子

本稿は「萬葉集―一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研究(七)―」（「大阪樟蔭女子大学論集」第40号）に引き続き、今回は巻十二から、一首中に表れる同じ漢字が異なる訓みをしているものを抽出し考察していく。

☆比日　寐之不レ寐（イ／ネラエ）　敷細布　手枕纏　寐欲（ネ）（十二・2844）

145、寐之不レ寐（イ／ネラエ）　寐欲（ネ）

第二句目に二個と第五句目に一個、「寐」という同じ漢字が用いられている。第二句目の「イ」に「寐」の漢字が用いられているが、集中にはこの漢字の外、「宿」・「眠」・「寝」のような表記がある。「イ」は睡眠することを意味するので、むしろ「寐」の漢字より「眠」の漢字を用いる方が相応しいように思えるが、敢えて「寐」の漢字を用いたのは統一性をもたせようとしたものか。

一方「寐」を「ネラエ」と訓むことについて、『萬葉集註釋』に「ネラレ」と訓む訓み方が『元暦（校）本萬葉集』にある（巻十二・十頁）と指摘されているが、諸注多く「ネラエ」の方に従っている。考えるに集中において「ネラレ」という語は集中見当たらないが、「ネラエ」という例は、「所宿」（一・71）・（四・639）・（八・1484）・（十・2226）に、又、仮名書例で「祢良延」（十五・3678）・「年良延」（十五・3680）・「祢良要」（十五・3684）にみられるところから「ネラエ」と訓む方が正しいように思われる。尤も「寐」を「ネラエ」と訓む訓み方は集中ここのみしかない。「寐（ネラエ）」という言葉は本来「ネ」に「ラエ」が添えられて「ネラエ」になったものであろう。

第五句目の「ネ」に「寐」の漢字を用いているが、集中「寐」の漢字の外、「宿（ネ）」が極めて多く用いられ、次いで「寝（ネ）」・「睡（ネ）」・「眠（ネ）」の漢字が用いられている。ここで敢えて、「寐」の漢字を用いたのは統一性を意識したのではないだろうか。

☆真珠服（ツク）　遠兼　念　一重衣　一人服寐（キテ）（十二・2853）

146、真珠服（ツク）　一人服寐（キテ）

第一句目と第五句目に「服」という漢字を用い、一方は「ツク」と訓み、もう一方は「キテ」と訓んでいる。「服」を「ツク」と訓む例は集中にここ以外にはみられず奇異な感じをうける。『日本古典文学大系萬葉集』に、

原文の服は名義抄にキルと訓む。着ることは身にツケル意であるからツクと訓む（二六〇頁）

とあるが、少しこじつけの感じがしないでもない。この「服」は原文に「眼」とあったのを『古義』が「服」と改めたのであるが、確かに「眼」と「服」はやや似た文字である。「マタマツク」の集中の表記を調べてみると、「真王付」（四・674）・「真王就」（十二・2973）・「真珠付」（七・1341）この三種類が各一例ずつ用いられている。これから勘案すれば、案外「真珠就」と書くべきところを「真珠服」と誤ったのであるかもしれない。または、第五句目の「服寐（キテヌレ）」の「服」と揃えようと、「真珠服」と意識的に「服」の文字を用いたものであろうか。

結句の「一人服寐（ヒトリキテヌレ）」の「キ」を「服」の文字を用いているのは、集中多くの例をみる。「キ」は「服」の文字の外、「著」の文字も極めて多く用いられており、「著」の文字で、「一人著寐」と書いても何ら差し支えはないが、敢えて「服」の文字を用いたのは、やはり初句の「服」と統一性を意識したものであろうか。

☆夜干玉之（ヌ）　夜乎（ヨ）長鴨　吾背子之　夢尓夢西　所レ見還良武（十二・2890）

147、夜干玉之（ヌ）　夜乎（ヨ）長鴨

「夜」を「ヌ」と訓むのは、「寝（ヌ）」るのは夜という概念から、「夜」も「ヌ」となったのであろうか。集中「ヌバタマ」の表記は、この外、「野干玉」・「烏玉」。「烏珠」・「黒玉」などみられるが、今の場合「夜干玉」の文字を用いたのは、第二句目の最初の文字「夜」を意識したものであろうか。「夜干玉」の表記を巻ごとにみてみると、巻四・巻七・巻八・巻十一・巻十二・巻十九に用いられている。

一方、「夜」を「ヨ」と訓むのは集中極めて多く漢字本義に添う使い方をしているといえよう。集中には「夜（ヨ）」の文字の外、「宵（ヨ）」の文字を使っているところがあるが、「ヨ」はやはり「夜」の文字を使う方が自然である。

☆緑兒之　為社乳母（オモ）者　求云　乳飲（チ）哉君之　於毛求覧（十二・2925）

148、為社乳母（オモ）者　乳飲（チ）哉君之

第二句目の「乳母」を「オモ」と訓むことについて、『字訓』に、

おも〔母・嬭〕―乳で子育てする母をいう。その母に代って授乳するものを「ちおも」というが、「おも」にその両義があるので、「ちおも」は後者を区別した名である。……（略）……。乳母（うば）は古くは「みおも」といい、のち「ちおも」といった。（一九三頁）

とある。したがって、本来、「乳母」は「チオモ」と訓むのが正しいが、「為社乳母者」は七音句の位置するところであるため、「チオモ」と訓むと八音になり不都合である。思うに「チオモ」の「チ」を略して、「オモ」とし、「為社乳母者（タメコソオモハ）」と七音で訓んだのであろう。因に「乳母」を「オモ」と訓んでいるのは、集中この外、次の（十二・2926）に「求流乳母尓（オモニ）」とみられるのみで、あとはすべて「母」一字を「オモ」と訓んでいるが、今の場合第四句目の「乳飲（チノメ）」を意識して、「乳母」の文字を用い「オモ」と訓んだのではないか。ここで第五句目をみてみたい。「於毛求覧（オモモトムラム）」と「オモ」の文字を「於毛」と別字を用いているのは歌意の内容によったのではないか。すなわち、緑兒の場合は「乳母」を用い、君の場合は「於毛」を用い意図的に別字を用いようとしたと思われる。集中「於毛」の文字はここのみの孤例である。

一方、第四句目の「乳（チ）」は、漢字本義に添う使い方をしているが、集中ここのみしかみられない。もう一個所「乳（チ）」の意味で「知（チ）」の文字が用いられているものが（十八・4122）番歌にあるが、仮名書の長歌にみられる。因に「乳」を「チチ」と訓む例は集中にはみられず、のちに「チチ」というようになったものと思われる。

☆白細之　手本寛久　人之宿（ヌル）　味宿（ウマイ）者不レ寐哉　戀将レ渡（十二・2963）

149、人之宿（ヌル）　味宿（ウマイ）者不レ寐哉

「宿」を「ヌル」と訓むのも「イ」と訓むのも、今の我々からすれば奇異な感じを受ける訓み方である。「宿（ヤド）」は「寝る所」という概念で「宿」を「ヌル」・「イ」として用いたと思われる。「宿」を「ヌル」と訓む例はこの外、（八・1461）・（八・1631）・（十一・2365）・（十一・2476）・（十一・2800）・（十二・2865）・（十二・2962）・（十二・2999）・（十二・3065）・（十七・3978）に使われており案外多くの例をみる。また、「寐（ヌル）」の文字を用いている場合は、（一・6）・（十・2264）・（十一・2615）・（十三・3274）・（十三・3329）に、「睡（ヌル）」の文字を用いている場合は（十三・3274）に、「眠（ヌル）」は（十三・3275）・（十三・3283）にそれぞれ用いられているが、漢字本義に添う用い方をしている方が例が少ないのは、どうやら「宿」・「寐」の文字を混乱して使っていた気配を感じる。

一方、「ウマイ」は普通「味寝」という文字を用い「快く寝入ること、安眠」という意味であるが、今の場合通常文字を使わず、「味宿」という文字を用いたのは、やはり第三句目の「人之宿」の「宿」を意識して第四句目も「味宿」と「宿」の文字を用いたものと思われる。因に集中には、「ウマイ」の表記は「味寐」（十三・3329）・「味眠」（十三・3274）の文字がみられる。

☆如是耳　在家流君乎　衣尓有（ナラ）者　下毛将レ著跡　吾念（オモヘ）有家留（十二・2964）

150、衣尓有（ナラ）者　吾念（オモヘ）有家留

第三句目の「有」を「ナラ」と訓んでいるが、これは「にあら」の約で、集中「有」の文字の外、「在」の文字も数多くみられるが、今の場

合通常の「有」という文字を用いている。

一方、第五句目の「念有」の表記は、集中この文字を用いる場合が一番多くみられ、この外、「思有」（三・481）・「思篇」（十一・2558）の文字が各一例ずつみられるのみである。したがって、第三句目の「有」も第五句目の「有」も極自然に用いたものと思われる。

☆真十鏡　見座吾背子　吾形見　将レ持辰尓　将レ不レ相哉（十二・2978）

151、将レ持辰尓　将レ不レ相哉

第四句目の最初の文字、「将」を「ラム」と訓むのは集中案外多くの例をみるが、この外、「良牟」・「良武」の表記が最も多く使われている。

一方、第五句目の最初にも「将」の文字を用い「メ」と訓んでいる。集中「将」を「メ」と訓む例は案外多くみられるが、「目」の文字を用いている方がかなり多くみられる。今の場合、第四句目の四文字の最初の文字に「将」を使い、第五句目の四文字の最初の文字に「将」を使い、同じ位置するところに、同じように助動詞として用いられているのは恐らく意識的に揃えて書いたものと思われる。

☆梓弓　引見緩見　思見而　既心齒　因尓思物乎（十二・2986）

152、思見而　因尓思物乎

第三句目に「思見」という言葉が表れるが、集中ここのみの孤例である。

一方、第五句目の「尓思」という助動詞に、「思」という文字が用いてある。集中、助動詞の「ニシ」の表記は、「爾之」が最も多く、次いで、「西」や「去」・「去之」などの表記がみられる。今の場合の「尓思」の表記は、（十二・2952）・（十四・3377）・（十四・3434）・（十四・3487）のみにみられる。したがって、第三句目の「思見」の「思」の文字を意識して、第五句目の「ニシ」の表記も「思」の文字を使い「尓思」と表記したのではなかろうか。

☆嫐嬬等之　續麻之多田有　打麻懸　續時無二　戀度鴨（十二・2990）

153、續麻之多田有　打麻

第二句目の「續麻」とは、「績んだ麻糸・つなぎ合わせて縒った麻糸」（『時代別国語大辞典上代編』）のことである。集中、ここの外、同じ文字で（六・1056）にみられるのみであるが、枕詞で「續麻成」と（六・928）・（十三・3243）の二例のみに同じ文字で表れる。したがって、「ウミヲ」は「續麻」の表記しかない。

一方、「打麻」について『字訓』に、

そ〔麻〕―繊維をとる植物類一般の称。……（略）……。「そ」は複合語のなかにのみ残されているので、「あさ」の古形かと思われる。また「を」ともいい、「あさを」と複合するが、「そ」は少し異なり、すでに繊維化されたものをいう語であろう。……（略）……。

「うち麻」という語が〔万葉〕にみえ、麻をうって繊維をとる作業をいう語。（四三一頁）

とある。集中には「打麻」という語はここの外は、枕詞で「打麻乎」と（一・23）にみえるのみであまり例をみない語である。

結局、第二句目と第三句目に「麻」という同じ文字を用いているのは、両者共、この文字以外はみられないので、極自然に表記したものであろう。

☆垂乳根之　母我養蚕乃　眉隠　馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿　異母二不レ相而（十二・2991）

154、母我養蚕乃　異母二不レ相而

第二句目の「母」は漢字本義に添う使い方をしており集中には多くの例をみる。「ハハ」は「母」の文字を用いている外は、「父は妣毛」（九・1800）に「妣」の文字を用いている例が一例のみみられるが、あとはすべて通常の「母」という文字を用いている。

一方、第五句目に「異母」という文字を用いているが、『日本古典文学全集　萬葉集三』の頭注によると、「イモの原文『異母』は、この妹が異母妹であることを示す用字か」とあり、また、『萬葉集註釋』には「妹を『異母』と書いたのも他に無い戯書である」とある。集中には「イモ」は「妹」という文字を用い、「異母」の文字を用いているのは、ここのみの孤例である。思うに第二句目の「母」の文字を意識して、第五句目も「イモ」を「妹」の文字を用いるところを、「異母」と書いたのではないか。どうもそのように思えてならないのである。

☆玉手次　不レ懸者辛苦　懸垂者　續手見巻之　欲寸君可毛（十二・2992）

155、玉手次　續手見巻之

第一句目と第四句目の上から二字目の位置するところに、各々「手」という文字が使ってある。第一句目の「タマダスキ」は枕詞で、この「玉手次」という文字を用いている例が一番多く、次いで「珠手次」、「玉田次」の順で、この三種の表記しか集中にはみられない。今の場合通用の文字を用いて表記してある。

一方、第四句目の「手」は助動詞で集中非常に多くの例をみる。この外、「天」・「氐」・「底」などもより多くの例をみるが、今の場合、やはり第一句目の「玉手次」の「手」を意識して第四句目も「手」の文字を用いたのであろうか。

☆春日野尓　照有暮日之　外耳　君乎相見而　今曽悔寸（十二・3001）

156、春日野尓　照有暮日之

第一句目の「春日野」は集中すべてこの文字で表記されているが、「春日野」は固有名詞として、固定してまぎれないだけの歴史をもって使われてきた関係上、慣用的に極自然に書かれたものである。

一方、第二句目の「暮日（ユフヒ）」については、この外、同じ漢字表記が（十三・3234）にみられ、また、「夕日（ユフヒ）」の漢字表記が（七・1342）に一例のみみられるだけである。

「ユフ」について『字訓』に次のように解かれている。

ゆふ〔夕・夜・暮〕―日ぐれのときをいう。「ゆふ」の時間帯を「ゆふべ」という。一日の時間帯を「あさ」「ひる」「ゆふ」に区分し、「ゆふ」には「よる」をも含めていう。……（略）……複合語として用いることが多い。……（略）……。夕・夜・暮などの字を用いる。（七七八頁）

とある。これからすると、今いう「夕日」のことを、「暮日」という文字を用いても何ら差支えはない。したがって、「春日野」も「暮日」も極自然に書いたものと思われる。

☆雨毛零　夜毛更深利（フケ）　今更（イマサラニ）　君将レ行哉　紐解設名（十二・3124）

157、夜毛更深利（フケ）　今更（イマサラニ）

第二句目の「フケ」の漢字表記は「更深」と二字漢字で用いられている。この二字漢字が用いられているのは集中、ここの外、（十二・2864）に「夜更深（フケ）去者」とみられるのみで、あとは多く「深（フケ）」と一字で書かれている。今の場合は「次第に夜が深くなる」という意味で「深」の文字の上に同根の「更」が添えられたものか。あるいは第四句目の「今更」を意識してあとから、「深」と一字あったところに「更」の文字を加えたものか。しかし、杜甫の詩に「流レ汗臥二江亭一、更深氣如レ縷」とあるのは注意を惹く。この万葉集の記載者はこういった漢詩の中の「更深」を意識して用いたものか。

一方、第三句目の「今更（イマサラニ）」の漢字表記は、集中においてはこの漢字しかみられない。

☆白細之　君之下紐　吾左倍尓　今日結而名（ケフ）　将レ相日（ヒ）之為（十二・3181）

158、今日（ケフ）結而名　将相レ日（ヒ）之為

第四句目に「今日（ケフ）」という語が用いられ、第五句目に「日（ヒ）」という語が用いられ、双方に「日」という文字が使われているが、一方は「日」を「フ」と訓み、一方は「日」を「ヒ」と訓んでいる。

「ケフ」について『字訓』に次のように解かれている。

けふ〔今日〕―この一日をいう。「けふ」の「け」は「けさ」の「け」で、「此（こ）」より転じたもの、「けふ」の「ふ」は「きのふ」の「ふ」のように日をいう。……（略）……。

漢字は単音節語であるためか、「けふ」を意味する字がない。「きのふ」は昨（さく）・昔（せき）、「あした」には明（めい）・翌（よく）があるが、「けふ」は「今日」、「けさ」は「今朝」のようにいう外なく、しかも「今（きん）」は壺などに用いる蓋栓の形で、日時の義に用いるのは仮借義である。……（略）……（三一八～三一九頁）

とあるように「今日（ケフ）」は、「ケ」と「フ」から成る言葉である。現代は「今

日」を「キョウ」と訓み、一語として固定した訓みから考えると、「今日」の「日」を「フ」と訓むことは奇異な感じがするが、もともと「ケフ」は「ケ」と「フ」が複合して造られた言葉である。集中には、「ケフ」は「今日」と表記する場合がほとんどで、「今」一字を用いている場合が（七・1406）に「前裳今裳」とあり、また、（十一・2391）に「今朝」と仮名書を除けば二例のみみられるが、これは恐らく「今日」と書くところを、「日」を省略して「今」だけ書いて「ケフ」としたと思われる。

一方、第五句目に「日」を「ヒ」と附訓しているが、これは漢字本義に添う訓みをし、集中には非常に多くの例をみる。次に多く用いられているのは、「比」の文字で「日」の意味を表すものも案外多くの例をみる。すなわち、第五句目の「日」は「比」を用いても差支えないと思われるが、第四句目の「今日」の文字を意識して、「日」の文字を用いたのかもしれない。

☆陰夜之　田時毛不レ知　山越而　往座君乎者　何時将レ待（十二・3186）

159、田時毛不レ知　何時将レ待

第二句目の「田時」の「時」と、第五句目の「何時」の「時」と同じ文字が用いてある。

「田時」というのは「田付」の古形であろうと思われる。「タドキ」が母音交替して「タヅキ」になり、普通「田付」という文字を使い「手がかり。様子」という意味をもつ。集中においては「田付」の文字の方が、「田時」の文字よりやや多く使われている。いずれにせよ両者否定形と共に用いられるのが特徴である。

さて、第二句目に「田付」という語を用いても何ら差支えがないが、「田時」という方の語を敢えて用いたのは、第五句目に「何時」という文字を使い、その「時」という文字を意識して記載したかったのではないかと思う。

一方、第五句目の「何時」は、時を表す不定称であることは周知のところであろうが、集中においては、「何時」の文字を用いている場合が圧倒的に多く、字義に適った使い方をしている。あとは仮名書を除けば、（七・1154）に「何暇尓」とあり、また（十一・2447）に「何畢」とあり、この二箇所のみ「イツ」に「何」の一字を用いて表している。したがって、（十二・3186）の「何時」は通用の二字漢字を用いて自然に記載したものであろうと思われるが、この「何時」の文字を意識して、第二句目は「田時」の文字を敢えて用いて記載したように思える。

以上、巻十二には三百八十首の短歌（長歌ナシ、旋頭歌ナシ）があるが、その中から一首中に同じ漢字が二個以上使われ、それらが異なる訓みをしているもののみを選出して検討した。結局、記載者が、一首の歌を漢字で表記する場合、いろいろ工夫をしながら記載したことがわかる。

（続）

○テキストは『萬葉集』本文篇（佐竹昭広・木下正俊・小島憲之　共著・塙書房）を使用した。